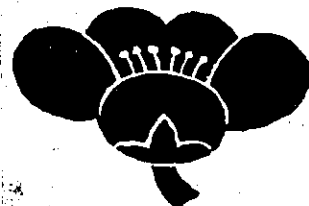


日本農民 建築

国立保健医療科学院蔵書



10012213



QLD
8
4

旅の感想と日誌から

石 原 憲 治

斯うして各府縣にわたつて、農家の實情をしらべて歩いて居ると、もう何度も行つた府縣でも、あそこも見たい、こゝも調べたいといふ所がいくつも出て来るものだ。一通りの調査は既に全國的に廻つては居るものゝ、いざ出版となるとつい怠が出て来る。

未知の國に對する憧れの様に、あの山の向ふの谷はどうなつて居るだらうか、又それらの人々の生活にも接して見たいといふ氣持が動いて来る。

先年丹波の篠山の方から船井郡の國部に出て、殿田驛から世木村に出て調査をした事があつたが、その資料は既に京都府の輯に記録した通りである。その際にも北桑田郡の方に入つて見たいと思つて居つたが日時が許さぬのでそのまゝ歸つたのであつた。昨秋のことその機會があつたので、わたしは京都北部から高雄山の麓を経て周山へ行く乗合バスに乗つて終に此の北桑田郡に足を入れ、何となく憧れて居た山國村や黒田村を調べる事が出来たのは幸であつた。時は丁度松茸の時期で、山國村では値段が京都の半分位であつたと思ふ。

その日は周山の部落を流れて居る大堰川の上流に架してある橋詰の宿に泊つた。此の川は殿田に出て更に保津川に合流するものであるが此の附近は一つの盆地の形をした環境の内

に靜かに横る。秋になれば京都より團體などで松茸狩に來る人達も多く、夏は鯖釣などに夕方から來る人達もあるとの事だ。

翌朝周山の部落を一週して、新道と舊道とに接して夫々異つた形態に發達しつゝある聚落の形態を面白く觀察したり、舊道の農家や、新道の町屋風の杉皮葺の家の寫眞などを撮つてから此の部落を出發して山に沿つた道を山國村へ取つた。同じ京都府下でも丹波の方と山城の方とは氣分が大分違ふ様だ。此の谷の交通は殿田の方に通じて居るもので、バスは殿田から山國村、黒田村へ通じて居る。

山國村の役場のある宇比賀江から大堰川の橋を渡ると山の裾に二十戸許りの小さな部落が巢喰つた様な形をして横つて居る。わたしはその邊を寫眞を撮り乍ら古い家を探して居ると、幸にそこに居た農夫の一人がその一軒の家(村山岩次郎氏宅)に案内してくれた。石段を數段上ると左に土蔵と牛舎があり、右に剪裁があつてその中門の側に玄關の土間がある。間取は蔭間型で京都府下の世木村で説明したものと同様であつた。即ち玄關の後に廣い臺所があり、その上手に部屋が二室奥行に並んで前面に座敷がある。臺所の下手に板間と内庭がある。表の玄關から板間に三尺幅の通り間と稱する廊下があるが、土間は裏丈だけで表の方にはない。だから表玄關の方はやゝ住宅風になつて居ると思はれる。他の地方では大抵玄關の土間から直ちに裏のニワに通じて居るが此の邊の間取は違つて居る。

内庭には板間から接続してニワに面して、茶釜、オクドサン、オ荒神サンが並んでゐる。オ荒神サンは大釜の事である。オ荒神サンの隣にも一つ御飯の釜がある。他の家にはその隣に牛の飼バの釜が並んで居た。

黒田村で見た所では此のオクドサンとオ荒神サンの前に狭い板の間が附いて居つて、此の處で火焚をする様になつたものがあつたが、是れを様と呼んで居た。

歸へりに村山氏が教えてくれた術家が田の中に一軒建つて居る。それは小島家であるが庭に大樺樹が一株あるが見るからに數百年を経た様な枝ぶりであつた。此の家は立派な玄關構えのある大きな家で、表の長屋門も立派なものであつた。間取りもかなり複雑ではあつたが、前の村山氏の家を大きくした様なものである。此の家は屋根は瓦葺で切妻になつて居り、玄關は東向きで臺所の内庭は南の方を向いて居る。



此の構造は所謂蒸籠造と稱するもので、飛騨信州地方以東には多く見られるものであるが幾内地方には極く珍らしいものである。

正倉院の板倉は床下が高く、高床になつて居るが、中部は北の蒸籠は多く土地の上に直に建つて居るものが多い様だ。此の黒田村の板倉は高さ一尺六寸の土壇の上に建つて居て、床下約九寸の束が立つて居る。床下を覗いて見ると、土壇の内側、床板の下に根太を切り込んだ跡が一尺五寸間位に残つて居るが、一度組み直したものであらうと思ふ。壁體は厚さ凡そ三寸五分乃至四寸五分、丈凡そ七寸五分位の材を横に組み合せ、隅は一方に溝をつき、是れに他方を落したものであるが、是れは甲州のものと多少異つて居る。

る。

雲過ぎに山國村を辭して東隣の黒田村に行く、丁度乗合自動車があつたので下黒田の役場の東の橋詰で下車した。途中光嚴院天皇陵と後花園院天皇陵の附近を通る。下黒田では川がS字に曲つて、山が兩方から迫つて居るので中央に大隆道があつてその東西に部落が三つ位に散在して居る。此の部落には西直三氏の板倉がある事を聞いて居つたが見ると橋の向ふに真正面に建つて居るのがそれだとわかつた。去年大阪毎日の京都支局で調べた事があるが、その外にも昨年ドイツ人が來たとの事であるが、私が想像するにクウト氏ではあるまいかと思ふ。私は寫眞を撮つた外にスケッチをとつて來たから此處に載せる事とした。

此の構造は所謂蒸籠造と稱するもので、飛騨信州地方以東には多く見られるものであるが幾内地方には極く珍らしいものである。

正倉院の板倉は床下が高く、高床になつて居るが、中部は北の蒸籠は多く土地の上に直に建つて居るものが多い様だ。此の黒田村の板倉は高さ一尺六寸の土壇の上に建つて居て、床下約九寸の束が立つて居る。床下を覗いて見ると、土壇の内側、床板の下に根太を切り込んだ跡が一尺五寸間位に残つて居るが、一度組み直したものであらうと思ふ。壁體は厚さ凡そ三寸五分乃至四寸五分、丈凡そ七寸五分位の材を横に組み合せ、隅は一方に溝をつき、是れに他方を落したものであるが、是れは甲州のものと多少異つて居る。

三重縣伊賀國阿山郡三田村で此の様な蒸籠倉があると云ふ事を聞き、その所在も確めて見たが終に實地に見る機會を失つて居る。兎も角幾内地方に極めて稀であると云ふ事は事實である。

西氏の倉を見てから母屋も見せてもらつたが、大體前に述べた様な間取であるが家が大きく、多少複雑な間取になつて居る。

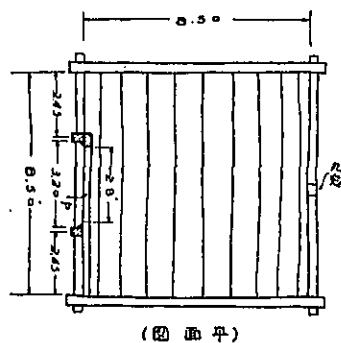
彼れ是れ四時近くになつて下黒田を出發、夕ぐれの山路を一人で歩いて、大布施に着いたのが五時三十分頃。途中で此の村の一資産家が事業に失敗して自殺したとかでその埋葬式が山の墓地で行はれて居つた。大布施からは乗合バスが京都今出川迄出る。六時に出發、七時に鞍馬で降りて電車に乗り換えて京都に歸つた。

滋賀縣の伊香郡が特殊な間取を持つて居るといふ事は、今から約十六年前全國の農家の間取の調査研究を一通り終えた時解つた事であつた。それでその後も伊香郡の古保里村には二度調査に出かけて居るが、今度はもつと山の方の部落を調べたいと思つて居つた。所が幸高等學校時代の友人伊夫伎直一君が伊吹村の出身であられるので、東京で逢つた時に伊夫伎さんの村の留守宅の方へ御紹介を願つておいた。そういふわけで昨秋京都の歸へりに長岡に下車して直ちにタクシーに乗つて伊吹山のすぐ麓の村を訪ねることが出来た。

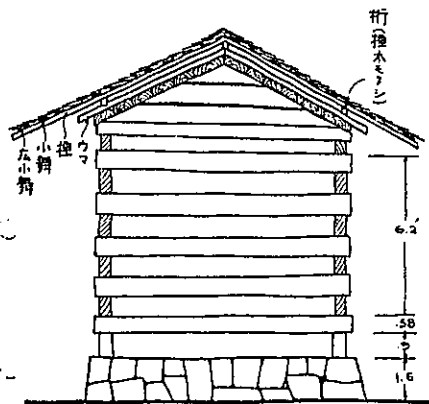
此の村は後に伊吹山を負ひ前に姉川の溪流を望んだ美しい

環境に恵まれた部落だと思つた。伊夫伎さんの宅は部落の中央右の高い石垣を築いた小高い所にある。

此の部落はほとんど小間入りになつて居るが、互葺の二階建の大きな家でも小間入りになつて居つた。此の部落は一村伊吹性を名のつて居るが、文字は夫々違つたものを使つて、伊富貴、贈吹、伊吹等色々な書き方がある。村も山も伊吹と書くが、神社は伊夫伎神社と書いて居る。伊吹も伊夫伎も何れも古い書方であらうが何れが古いかは私は知らない。然し此の山の名前と共に此の部落が古いものだと思ふ事は明かであると思ふ。



(圖 面 平)



屋根 おどろき 葺き 上 下 二 分 五 分 五 分 五 分

此の部落に來た時、伊吹山に登つて見たかつた。伊吹山は一三七七米で幾内地方では凡らく大嶽原及び大嶽山系に次いで一番高い山であらうと思ふ。高さは特に高いとは云えないかも知れない、むしろ中級の山であるが、その獨立した塊状の山容は珍らしく威壓的な面力を持つて居ると思つた。

○ 三河の遼來寺は昨年春であつたかラヂオで佛法僧の鳴く聲をお寺の本堂から放送された事がある。先年上設樂郡の本郷村を訪ねた際に遼來寺に寄る事が出来なかつたが、此の放送を聞いて以來機會があらば一度尋ねたいと思つておつた。幸、田口町には先年本郷町を訪ねた際に小學校長をして居られた窪田さんが住んで居られるので、此の町を訪ねる途中に遼來寺に參詣する機會が得られた。それは昨年八月の下旬であつたが山寺の下に枯槎屋といふ淋しい宿に泊つた。その夜女中に起されて目醒めて、こちらの渡り廊下の所がよく聞えますと曰ふのでこちらに行つて見ると、成程、一方は土壁になつて居るので、音響が反射されて、かすかにブツポーンと鳴く聲が山の彼方に聞えるのであつた。此の幽寂な氣持は今に私の記憶にはつきりと残つて居る。

その明る朝早く起きて山寺に參詣して見た。三河は徳川氏の發祥地で、此の寺は代々徳川氏の菩提寺だつたといふ事であるが、火災の爲鳥有に歸し今は昔の見る影もない。が然し境内に至る處に昔の寺院の敷地が山の中腹に石垣で築いてあるのを見ると、地方の小さな城郭も及ばぬ雄大なものだと思つた。

た。私は此の石垣だけで充分に昔の面影をしのぶ事が出来た。山の頂の方は片麻岩質の古い地層であるらしく思はれ、南嶺風の屏風岩は此の境内を一層幽邃なものにして居る。歸りに宿の前で硯石を土産に買つて歸へる。

田口町では數年ぶりに窪田さんに逢つて、色々御世話になり、栗山の和市の部落の方をすつと御案内願つた。お蔭で此の地方の様子がすつかり明になつた。此の地方は先年も澁澤さんが御出になつて詳しく民俗學的方面の調査をなされたところである。窪田さんの新築の御住に澁澤さんの書が見られた。三十六峯云々と書かれてあつたが、全く此の新宅から東を望むと、京都の東山にも比べる風景であると思つた。

石 濤 名 畫 譜

○ 小社近刊の畫集にして、從來刊行された石濤畫の複製は概ね原本の眞偽を鑑別せず、唯漫然と爲された缺點に鑒み、本集は多大の犠牲を拂つて周到なる比較研究と嚴密なる鑑査を重ね、其の確證ある作品のみを集大成したものである。頗る好評噴々として申込多數、御希望の方に内容見本を送呈す。

一二百五十部限定、全六輯今月第三輯公刊

一越前特瀧島子紙堅一尺六寸横一尺一寸六分

一每輯木版色刷一葉若くは中版二葉、寫眞玻璃版刷九葉(半折寫眞大)、高雅なる羅紗紙映入

一定價每輯金拾圓(地方送料六十錢)

著 治 憲 原 石

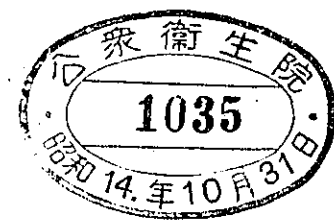
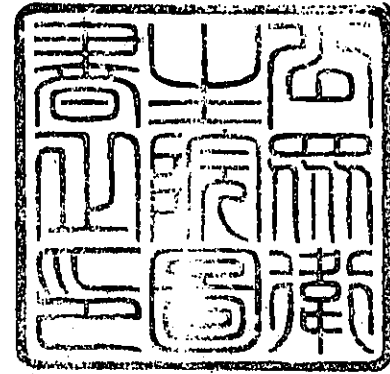
築建民農本日

輯 八 第



刊 社 樂 聚

Q.L.P
8
4



內容目次

圖版目次

1	本屋外観	(福井縣今立郡中河村某氏)
2	オイエ内部	(福井縣今立郡中河村辻本喜平氏)
3	宅地全景	(福井縣遠敷郡今福村小林彦氏)
4	本屋前面	(福井縣遠敷郡今福村藤井長右衛門氏)
5	臺所内部	(同 上)
6	部落景觀	(滋賀縣高嶋郡今津町宇福生)
7	本屋全景	(滋賀縣高嶋郡三谷村松井信次氏)
8	本屋全景	(滋賀縣伊香郡古保利村大音忠太夫氏)
9	臺所内部	(同 上)
10	炊事場	(同 上)
11	本屋外觀	(滋賀縣伊香郡古保利村大音政五郎氏)
12	臺所内部	(同 上)
13	本屋全景	(滋賀縣犬上郡多賀村樋口利八氏)
14	本屋前面	(滋賀縣甲賀郡大原村大原兵馬氏)
15	本屋内部	(滋賀縣甲賀郡大原村渡邊國藏氏)
16	宅地全景	(滋賀縣甲賀郡大原村樋口保藏氏)

17	本屋全景	(同 上)
18	宅地全景	(同 上)
19	風呂場	(三重縣阿山郡三田村中尾熊藏氏)
20	本屋全景	(同 上)
21	本屋全景	(三重縣多氣郡津田村小西作左衛門氏)
22	二ツ	(三重縣多氣郡津田村中西角兵衛氏)
23	本屋全景	(同 上)
24	本屋内部	(三重縣北牟婁郡赤羽村船田彌右衛門氏)

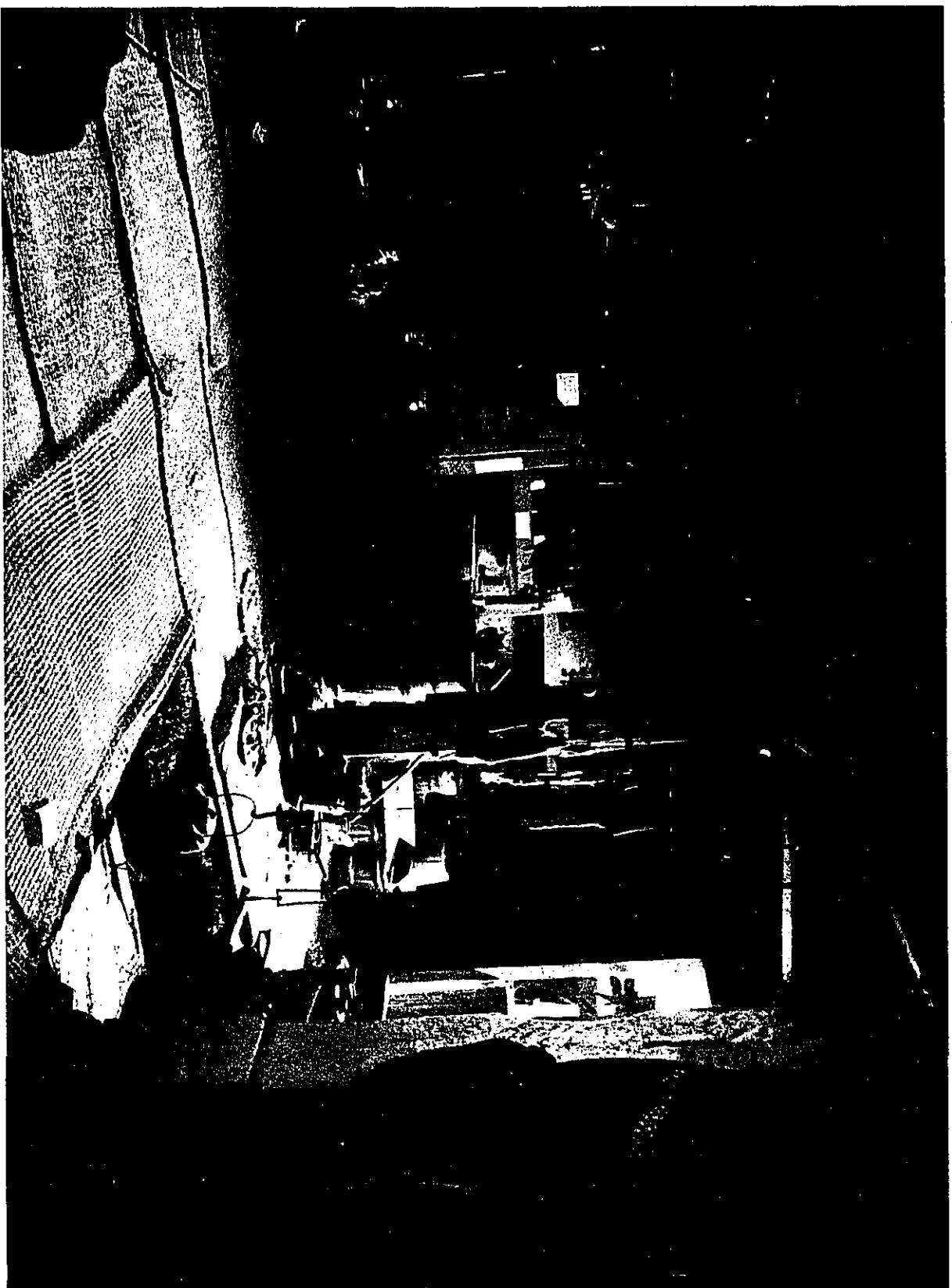
解説目次

福井縣下の概観.....	一
圖版説明.....	六
滋賀縣下の概観.....	九
圖版説明.....	一二
三重縣下の概観.....	一九
圖版説明.....	二四

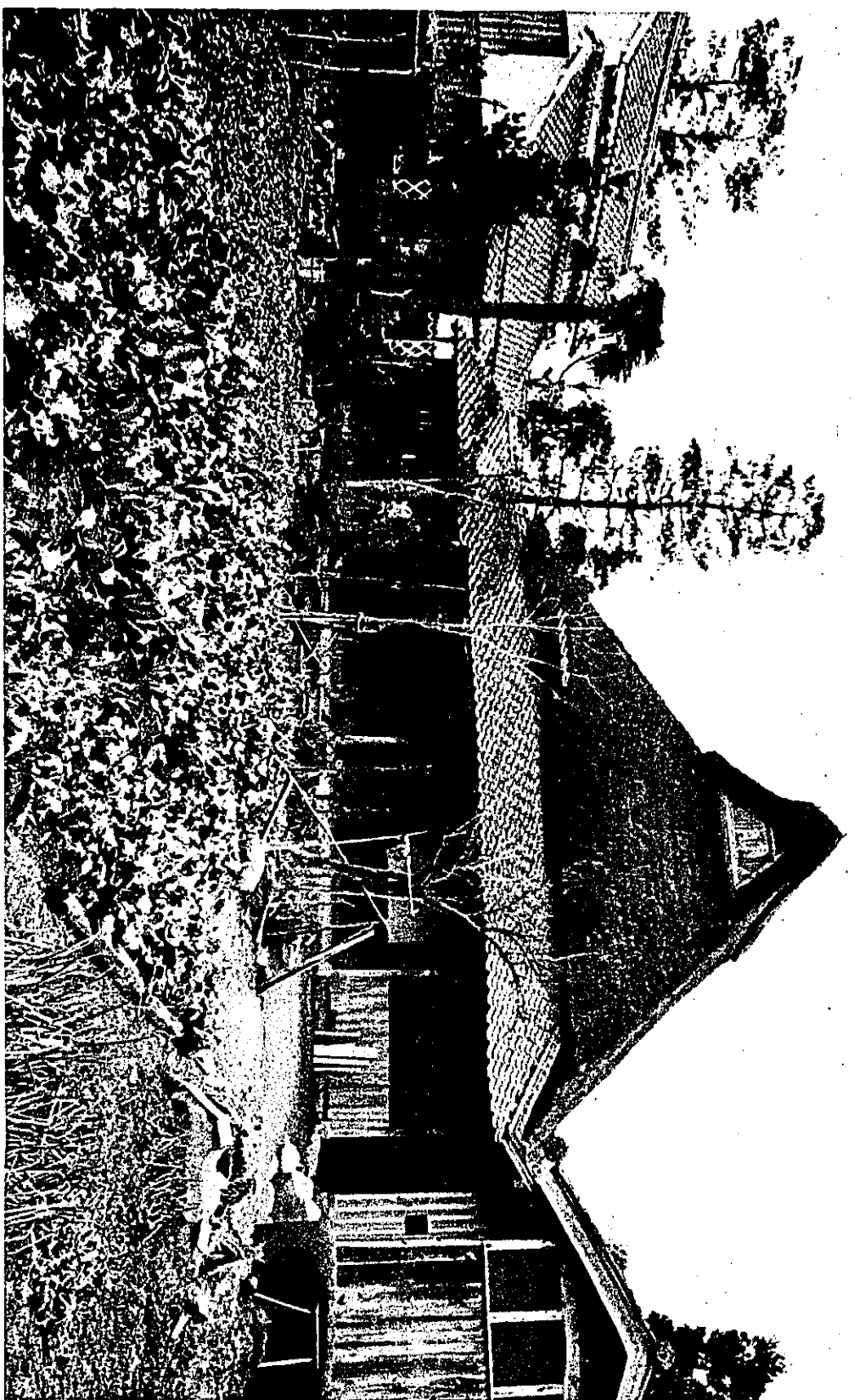
福井縣



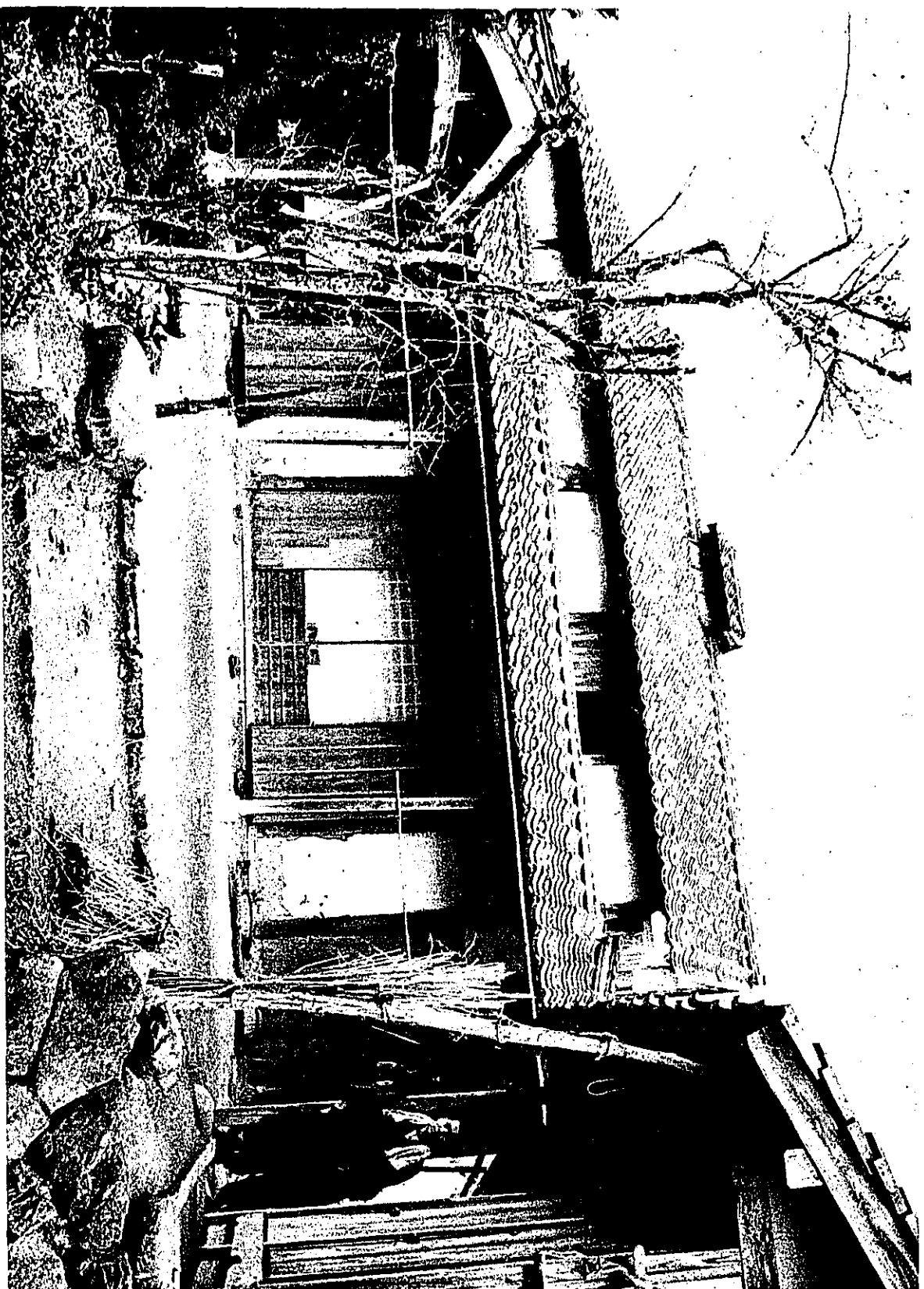
中河村 迁本家平氏 1



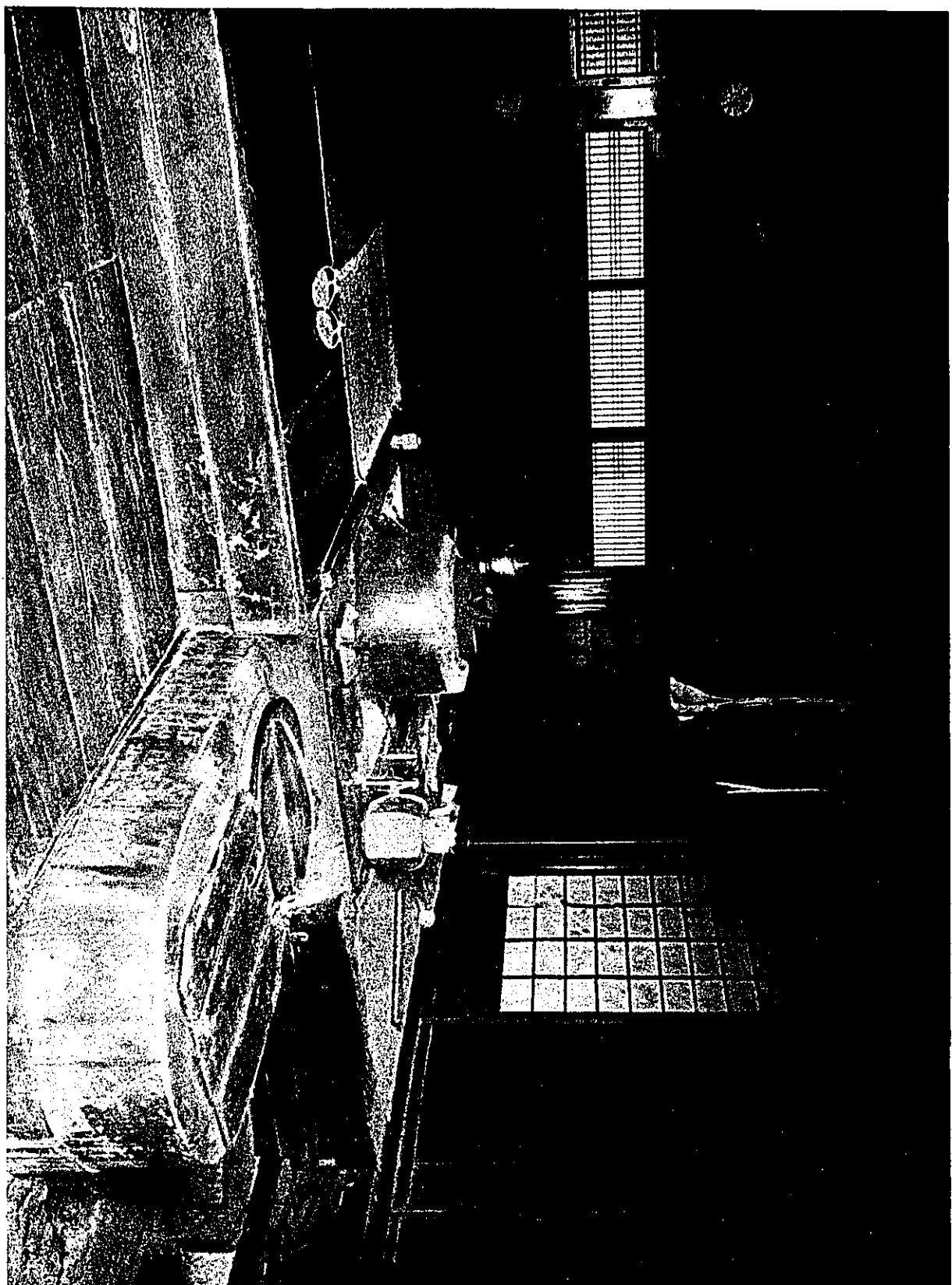
中河村 辻本喜平氏 2



今 藤 村 小 林 彦 氏 3



今 廊 村 藤 井 長 右 衛 門 氏



今福村 藤井長右門氏 5

縣下の概観

福井縣下の農家の間取は大部分が妻入の形式になつて居る。是れは京都府の概観の説明で述べてゐいた通りに小間入りと稱して居るが、若狹國の附近では平入りのものを大間入りと曰つてをる。若狹から京都府下の丹波國の方に入ると大間入りが一層多くなり、又近江國に入ると伊香郡附近の湖北の地方には小間入りの規則正しい整型の間取が多く見られる。

此の間取は石川縣下の概観で假りに縦屋造りといふ名稱を以つて説明して置いた通り能登國及び加賀國にも全般的に分布して居る事が明である。そして其處でも述べて置いた通り滋賀縣北部より福井縣及石川縣に亘つて分布して居る縦屋造りと、石川縣北部より富山縣、新潟縣にかけて分布して居るオイエを中心として發展する一聯の廣間型とを併せて是を「北陸系」と名づけて置く事が、より事實を明にする事と思ふ。

石川縣能登郡では妻入りの間取りの家を縦家と云ひ、平入りのものを横屋と稱して居るから、余は此の様な妻入りの系統を縦屋造りと稱してゐたのである。是は福井縣下で小間入りと稱してゐるものと同一である事が明になつたから、今後改めて「小間入り造り」の名稱を以つて此の系統の間取を呼ぶ事にしたいと思ふ。又富山縣の概観の節では新川郡地方の前土間型に就て述べてゐいたが、是れも小間入り造りと同一のものであるから茲に改めてゐきたい。此の間取の最も原始的なものは三室の原型をなしてをつて、前にオイエがあり、その後左右に座敷（又は奥間）と寢間（又は納戸）が並んで居るのである。此の三室の中心の柱を中柱と稱して居るが特にオイエの前方に大黒柱と稱するものが無い場合もあり、又ある場合もあるが中心には必ず柱があつて此の柱を中柱と稱することは一致してゐる。

圖版第一は趣前國今立郡中河村辻本氏宅の實例であるが、此の家の間取は右の原型に屬するものであるが、オイエ

は土間にヌカ（糲糠）を敷いた上に薄べりを敷いた丈で、入口に僅かにニワ（土間）があり、そこからオイエに履物を脱いで上るのであるが、オイエはニワより高さが三四寸高い丈で極めて衛生状態は不良である。座敷と納戸の方は床張りになつて一段高くなつてゐる。

此の様にオイエに床が張つてなくて、土間に蓆を敷いた様な状態にあるものは、實は三室でなくて中柱から奥の二室のみを室として数へるべきであらう。そうすると、石川縣能登郡白峯村の例で示した根萱と稱する合掌造りの例はその處でも説明して置いた通り此の最も原始型と見る事が出来ると思ふ。是れは何れも縦に入るもので、中山岩三郎氏の家は前が土間後が板間になつて居る。

尙ほ少し變型と見られるものに京都府下の概観で述べて置いた通り奥の二室の大きさが違つて片方の「奥」の間の方は中柱から後迄の廣さがあるが、片方の納戸が中柱よりも一間程後に後退して居る爲めに前面の仕切りが中柱の左と右とで喰違つた型のものが大野郡に見られる（第二圖参照）。それから第三圖の様に此の部分に狭い板間があるものがあり、或は更に大きくなると第四圖の如く四室の喰違の型式となるが、此の型式がそのまゝ平入りになつたものが京都府下の丹波にも多く見られるのである。

オイエは普通の家では床を張つて板間にしたものが多く、又奥の間取も更に整型の四室乃至六室に奥深く取るものがある。何れも小間の方は二間で奥に二室、三室と増加して行く。此の様な場合には奥に必ず佛間が取られて是れに並んで床間の附いた客間が取つてある。佛間には立派な佛壇が正面に祭られるものが多い。或る場合には客間の床間の裏に四疊敷位の休息間が僧侶の爲めに設けてあるものがある。

家は多く小間が南向きになつて居るから自然棟が南北に建つ事になるので、普通の家では東西が開いて、北側に床間と佛壇が南面して並んで居る。客間が多く西側にあつて、佛間が東側にあるものも多く、東と西に棟があるが立派な家になると北、東、西と三方に廻縁を設ける。

オイエは又臺所、勝手とも曰ふが、廣い板間になつて、爐を切つてあり炊事用の流しはその横の方に廣い石敷になつて居り、その横に風呂と井戸とがあるものが多い。オイエの板間の一部に疊を敷いて臺所として居るものもあり、又横の方に茶間、男部屋、便所、風呂、厩、物置等を附屬して建増したものがある。又廊下で此の勝手の板間から土藏に連絡したものがある。

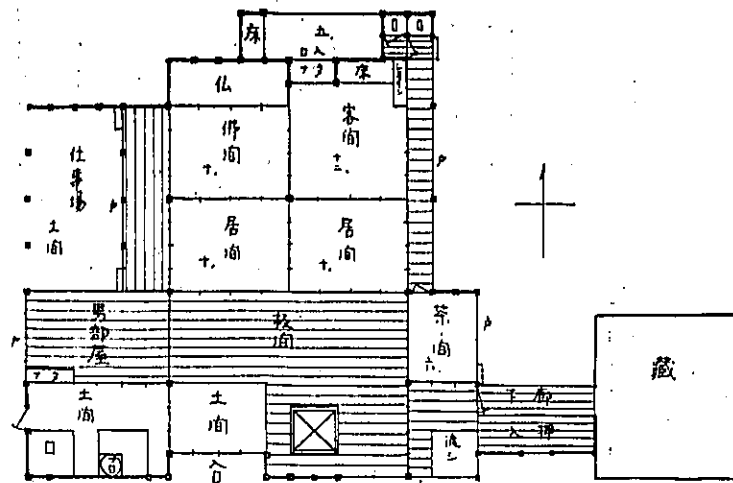
此の様に後方の座敷、佛間の部分は一定の型式になつて變らないが、前方の部分は附屬の色々な間取の爲めに左右に擴る傾向がある。

構造には素屋建と眞屋造りとあり、眞屋造りは岐阜縣大野郡白川村高橋久米治郎氏の例で説明してゐいたテウナ造りによく似て居る。即ち今立郡中河村の例に就て見ると乗り越えと稱する曲つた梁の兩端が柱で支えられ、その上にはれよりも短い梁が束の上に支えられ、此の上に屋根が支えられて居るのである。是れは構造計りでなく間取も兩者よく相似點を持つて居るが、白河の方には中柱がなく、又小間入りでなくて平入りになつて居る。又福井縣の方では柱の外に前後に下屋を葺下して取り込んであるが、是れは近江國伊香郡も同様の構造になつて居る。で本家建てとも云ふて居るが、本縣の大野郡下庄村で調べた時に土地の人が素屋建に對して出雲建と云ふて居つた。

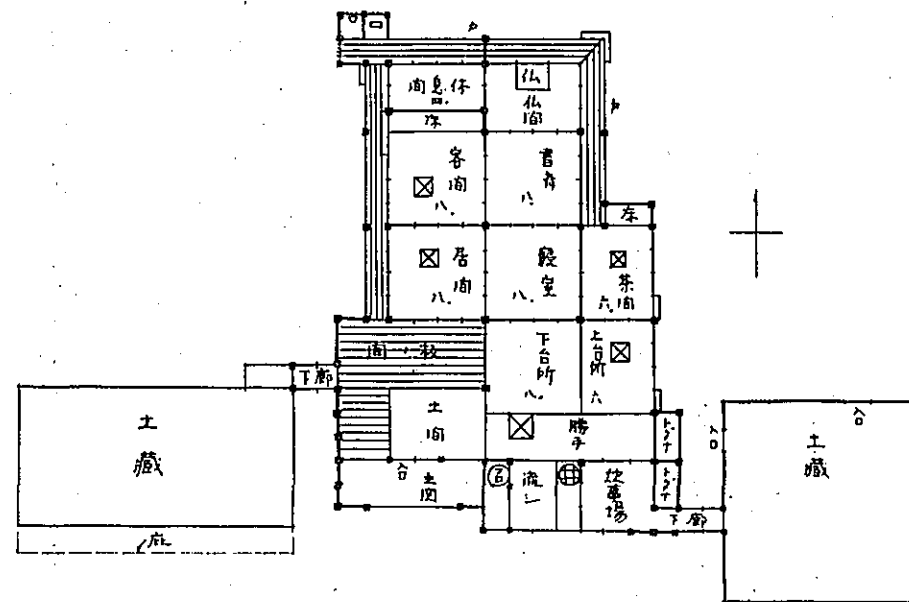
屋根裏は他の地方と同じくツシになつて居る。サスを合掌と云ひ、その下端は桁に支えてある。そして梁の位置は合掌の位置とは違つた所にあつて、梁と合掌とは直接の連絡なく、又梁、桁、柱をダボで差してあるものである。

素屋建と稱するものは上の短かい梁がなく、合掌が直ちに下の梁に支えられて居るもので、眞屋造りが二重梁の様な形になつて居るが、是れは一重になつて居る簡単な構造である。

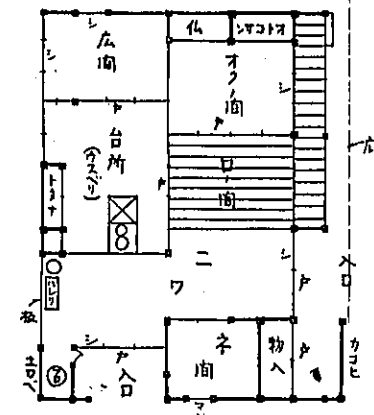
屋根裏をツシと曰ひ、梁の上に渡してある細木をツシゴと曰つて居る。眞屋作りの場合には床からツシ迄の高さが高くなるので住心地がよいが、素屋建ての場合には天井が低い。



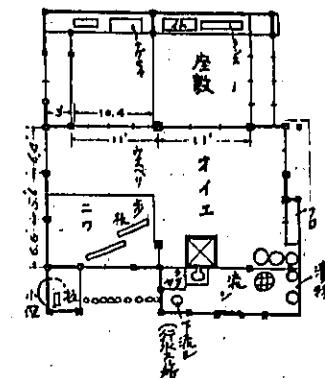
(リ入間小) 型 整 (五)
(村谷比志郡田吉)



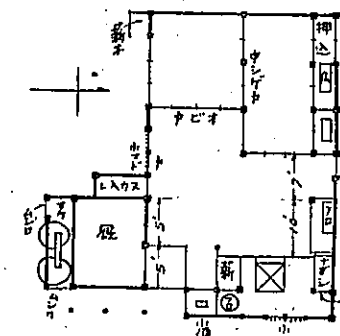
(リ入間小) 型 整 (六)
(村田和河郡立今)



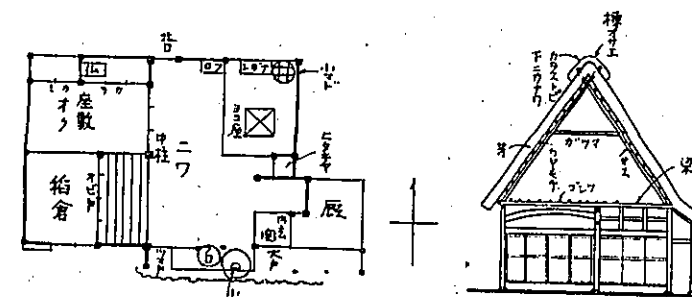
(リ入間小) 型 整 喰 (四)
(村福今郡敷遠)



(リ入間小) 型 原 (一)
(村河中郡敷遠)



(リ入間小) 型 原 (二)
(村庶下郡野大)



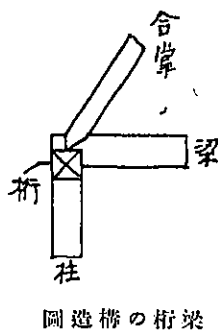
(リ入平) 型 原 (三)
(村庄下郡野大)

圖版説明

圖版第一、第二 越前國今立郡中河村辻本喜平氏宅であるが間取は縣下の概説で述べた如く二室の原型で、中柱の後に座敷と納戸があり、その前のオイエは土間にヌカ（穀穀のこと）を敷き上に薄縁を敷いて家族は平常はここに生活して居る。オイエの一隅入口にニワがあり、前面に瓦屋根を葺下した下屋の部分に流しがある。

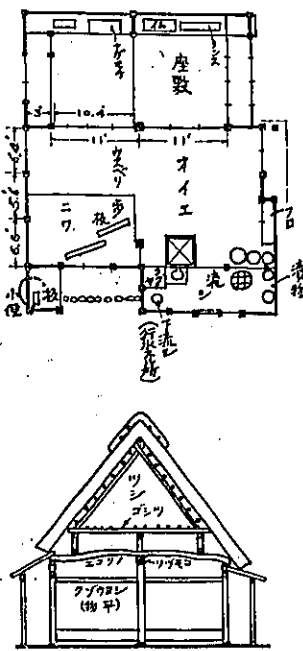
此の家は小間入りの間取の最も単純なもので、座敷と納戸丈は床を張つてあるのでオイエよりも床高が一尺五寸高くなつて居る。中柱の左右の柱間は真々十一尺、中柱の大きさは八寸

角になつて居るので柱間内法十尺四寸になつて居る。その左右に三尺の瓦葺の下屋を葺下してある。オイエの方は下屋を取込んであるのでそれ丈け廣くなつて居る。前面の方も是と同様で大黒柱から前方三尺の所に側柱を立て、流しの方は更に前方に一間の下屋を取込んで居る。中柱と大黒柱の上に弧釣りと云ふ太い梁を渡してある、昔は是れに米俵



を釣つたものであるが、此の家では今日でも、俵を釣つたり、その上に蓆などが置いてある。中柱の上には乗越えと云ふ梁が弧釣りを乗越えて渡してある。座敷と納戸の上り端には板戸が建て、あるがその上の鴨居をシヨウヅク又は平物と云ふて居るが、是れは他の地方で差物とも云ふ。

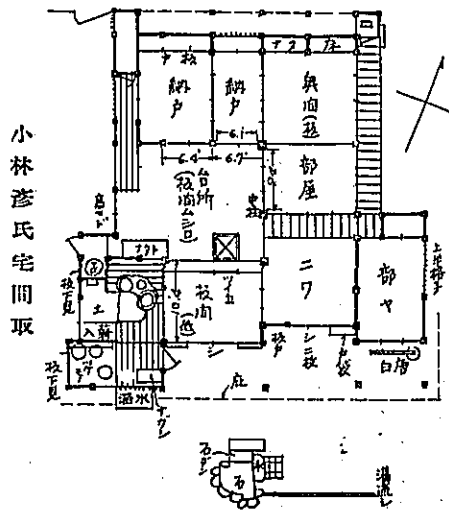
此の家の造りをマエと云ふて居つたが是れは眞屋の意味であらう。然し是れは他の地方で本屋建と云ふものと同じ構造であると思ふ。



辻本喜平氏宅間取及断面圖（中柱の位置）

圖版第一は辻本氏の附近の某氏の家の外観であるが、小間入りの造りになると、概説で述べた通りにオイエの左右又は前方の方に厩、納屋、仕事場等を建増する爲めに前方が複雑な形になるものが多い。是れはその一例である。然し辻本氏の家は單純な外觀と構造で母屋は茅葺でその前面と左右兩側に瓦葺の下屋が廻つて居るに過ぎない。棟の前面に破不が見えて居る事は此の圖版と同様である。

圖版第三 若狹國遠敷郡今福村小林彦氏宅であるが、此の家は小間入りの大きな例である。従つて間取も複雑で四間取の上に更に納戸が二室に分れて居るので整型の廣間型の様な形になつ居る。是れと同じ様な間取は平入りであるが京都府下の例に見る事が出来る。主人の小林老人は火災の時にオマ（大間）の方に出ると屋根の下りがずり落ちるから危険であるが小間の方に出ると安全だと云ふ事を話して居られた。下りと云ふのは茅葺屋根の竹の樑に當るものである。臺所の上には大きな桁と梁とを井筒に組んだものが見えて立派である。上等の作りは此の井桁を綱代に組むそうであるが是は木材が揃はぬと云ふ事である。



小林彦氏宅間取

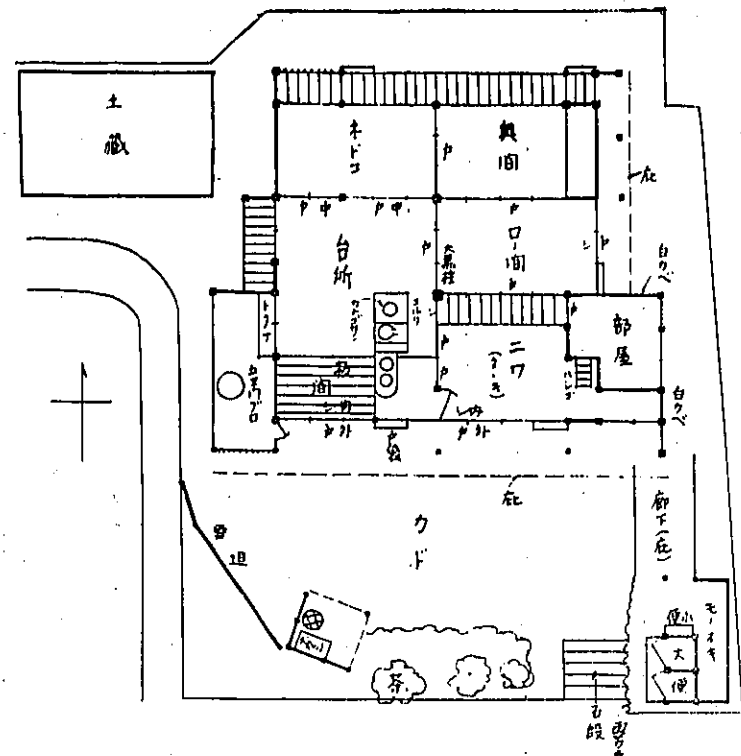
屋根の合掌は桁の上に支えてあり、梁は合掌とは違つた位置で桁に切り込んで組合せてある。此の家は建築されてから百五十年以上を經過して居るそうであるが周囲の瓦葺の下屋は後世に建増したものであらう。前面のニワ、板間竈、流しの附近は模様返をしたもので昔はクロがユルリ（圓爐）の前に並んで居つたのを現在の所へ移したものである。

圖版第三は此の家の前面の全景である。

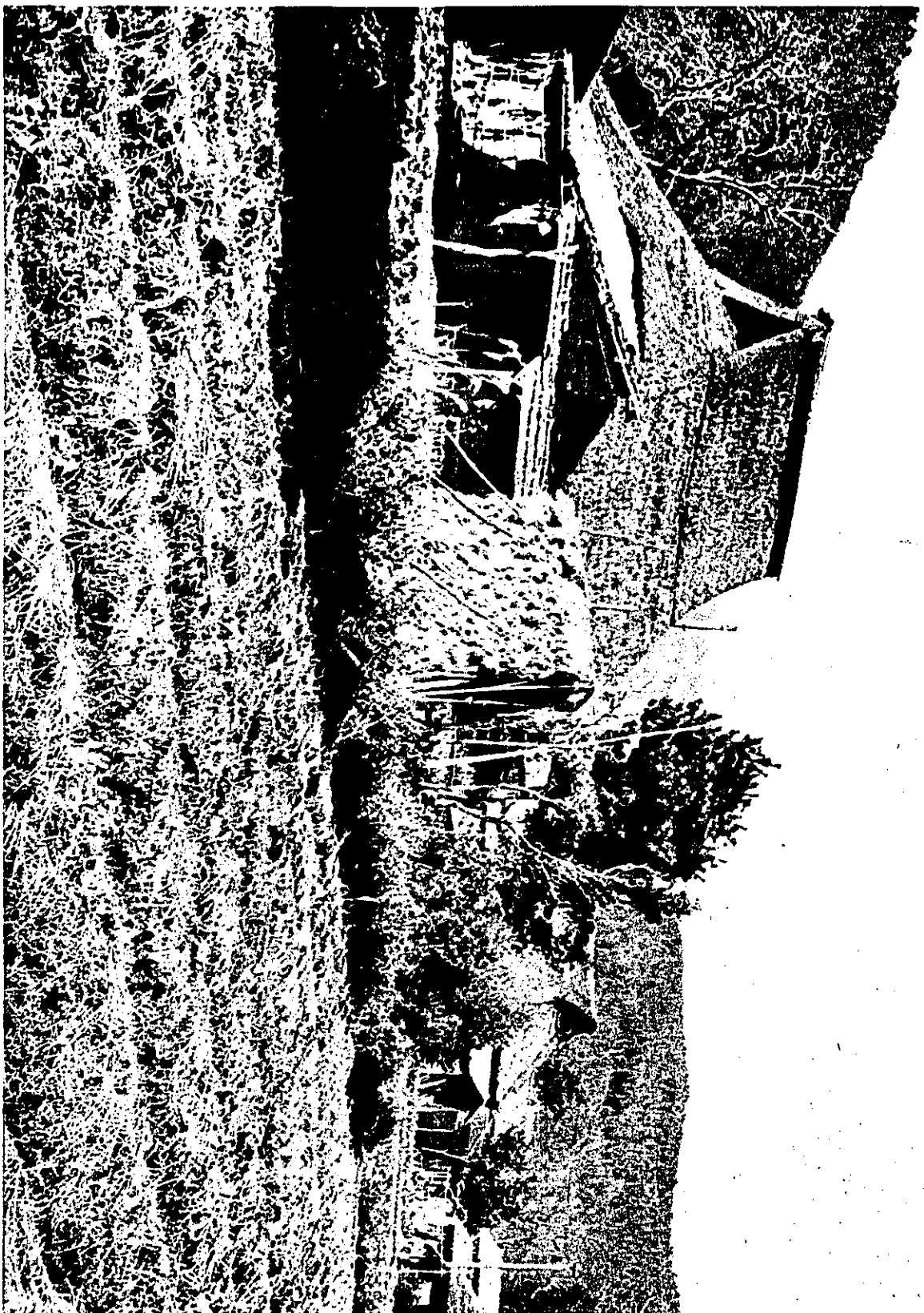
滋賀縣

宅も大體同様になつて居る。

藤井長右衛門氏宅地並に間取



圖版第四、第五 前圖版と同様今福村藤井長右衛門氏の宅で、切妻屋根瓦葺、大間入りの家である。此の家は底い二階建になつて居る。二階は物置に利用してあるが、小屋組は普通都會地で行はれて居る東の上に直接母屋を支える様な構造と異り、東の上端に弓形に曲つた母屋受けを支え、此の上に母屋を並べて居る。此の家の間取は大體に於て小林彦氏のものと同じであるが、小間入りの家は奥の正面が押入床間等になつて居るが、此の家は様になつて南北が開放してある。圖版第四は母屋の前面で壁面は白漆喰塗仕上げになつて居る。手前右に見えるのは大便所、左は井戸になつて居る。圖版第五は臺所の内部でユルリの手前には大釜があり、その一段下の手前にはオクドサンが二つ土間に向つて並んで居る。此の臺所の構えは小林氏の



今津町 都落景観 6



三谷村 松井信次氏 7